



目次

- ・コミュニティセンター事業 活動報告
- ・2015 年度医療キャンプ寄稿文
- ・キャンプ行程表・会計・お知らせ等



ケニア ゲム・イースト村コミュニティセンター事業のご報告

平素よりアフリカ支援 アサンテ ナゴヤの活動にご理解とご支援を賜わり、誠にありがとうございます。ことに、2013 年のコミュニティセンター建設募金、2014・15 年の井戸掘削募金と 2 年連続の募金にご協力下さり、皆様方の温かいお志に心より御礼申し上げます。井戸募金は 2015 年 2 月末に期間を設定しておりましたが、その後もご寄付を頂いており、10 月末日までに延べ募金件数 173 件、募金額合計 4,432,731 円となっております。

コミュニティセンター建設も井戸掘削も、アサンテ ナゴヤにとっては大きな事業です。2009 年に初めてゲム・イースト村を訪れ、こんなに早く村の人たちの悲願に応える事ができるとは想像していませんでした。皆様の大きなご支援を頂き、私たちにできることは、皆様方の真心を現地に届け、協力団体のルーネルドとの連絡を密にし、ケニアの現状をできるだけ正確にご報告差し上げることしかないと考えております。

井戸掘削事業について、今年の医療キャンプで村を訪れた際には、村の人たちがクリーンな水を飲んでいる姿を見ることができると考えておりましたが、残念ながら工事は完了していませんでした。200 メートル掘削し、水源に達することはできましたが、その水を汲み上げるポンプ、貯蔵するタンクの工事が進んでいません。コンクリートの土台だけができていました。

2015 年 2 月末の段階で、井戸を掘削できるだけの資金を集めることができ、現地では早速地質調査を始めました。調査完了後、役所から掘削許可を得るまでに何ヶ月も待たされました。その後、井戸掘削会社の代表者が病気になってしまったりして、工事が思うように進まず、当初の予定よりも大幅に遅れてしまっています。エリアス牧師はそのことに心を痛め、キャンプ中に掘削会社の代表者をゲム村に呼び、私たちに現状と今後の見通しについて説明させました。

センター建設も井戸掘削も、目的はゲム・イースト村の人たちに医療を提供できる環境を調べ、人々の健康に寄与することです。それはアサンテ ナゴヤとルーネルドの共通する認識です。2013・14 年の建設工事はエリアス牧師のリーダーシップのおかげで順調に進みました。今年の井戸掘削については工事が遅れてはいますが、必ずやり遂げてくれるものと信じています。



センターに井戸が設置されて、電気が通れば、いよいよ公的な医療施設、ヘルスセンターとしての認可を得る条件が整います。コミュニティセンター事業はこれからが本番です。認可を得るのは時間がかかるでしょう。ケニアの役所はなかなか動いてくれません。その後は医療スタッフの招聘、医療施設の運営、井戸の管理、クリーンな水の配布等、センターのマネジメントをルーネルドが行うことになります。お金もかかりますし、人材の問題もあります。これからは未知の領域と言ってもよいかもしれません。ゲム・イースト村のあるニャンザ州はケニア国内でもとりわけ医療の遅れた地域で、HIV 陽性率も国内最悪です。その理由は様々にあることでしょうけれど、いずれにせよ困難な課題がたくさんあるということです。ゲム・イースト村では現地の有力者であるエリアス牧師が中心になって頑張っています。ダグラスさんも、自分の故郷であるアセンボ村への支援を模索しています。



アサンテ ナゴヤは今年センターの建物内での2回目の医療キャンプを実施いたしました。アセンボでの診療、キシイの病院への訪問、HIV 検査の即日告知等の新しい試みも行いました。コミュニティセンター事業は、ゲム村にヘルスセンターを設立し、村の人たちに恒常的に医療を提供できるようにすることが目的です。これからもルーネルドと協力して、村の自立へと繋がる支援を続けて参りたいと思っています。どうぞこれからもご理解、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



今年の医療キャンプで得られたこと

アサンテナゴヤ理事 内海 眞

私たちが最初にゲム村を訪れたのは、2009年4月でした。今から約6年半前です。この訪問の目的は、ゲム村がどんなところで、現地 NGO である RUNELD がどのような人々によって構成され、そしてこの村で私たちに何ができるか、を探ることでした。この調査旅行で、私たちは初めてゲム村出身のエリアス牧師（通称パパ）、その娘さんのメアリー、メアリーの友人でカウンセラーのダグラスを始め、幾人かの RUNELD のメンバーに会うことが出来ました。彼らは、ゲム村の HIV 感染症の拡がりを何とか改善したい、という切迫した思いを私たちに語ってくれました。彼らのこの熱い思いに少しでも応えようと、翌年から無料医療キャンプを始めることになったのです。

抗 HIV 薬により血中 HIV 量を検出限界以下までに減ずることが可能となった現代においては、HIV 感染予防の最も有効な方法は治療であります。なぜなら、血中 HIV 量が検出限界以下になれば、HIV 伝搬の可能性は極めて低くなるからです。更に、HIV 陽性を知ることは、伝搬を成立させる行為に対し抑制的に作用することも期待されます。村人に HIV 検査を勧め、陽性であれば近くの（といっても数 km から 10km 離れた）医療施設で抗 HIV 薬による治療を行う、という流れを作れば、いずれこの村の HIV 感染症は拡大から縮小に転ずると期待できます。HIV 感染症の拡大は、HIV 陽性であることを知らない陽性者から陰性者に伝搬することによって促進されるのですから。

6年前にも村の周囲の医療施設では無料 HIV 検査や無料の抗 HIV 薬の投与が行われていましたが、その頃のゲム村の人々にとっては HIV 感染症について議論することも学ぶこともタブーでしたので、検査も行われず従って治療も実施されず、感染はじわじわと拡大していったのです。2010年における最初の医療キャンプでの HIV 陽

性率は、実に 23%もの高さでありました。その後の医療キャンプにおける HIV 検査の継続的实施と陽性者の医療施設への紹介、検査前後カウンセリングにおける検査と治療の重要性の説明、RUNELD のメンバーによる日常的な HIV 関連情報の村人への提供および HIV 陽性者に対する心理社会的サポート、さらに RUNELD によるゲム村周辺医療施設での HIV 検査を推奨する活動など、6年余に及ぶ地道な活動が今回のキャンプの素晴らしい成果を結実したように思えます（表）。この表からもわかるように、これまでずっと 15～20%の陽性率であったものが、今年のキャンプの検査では 5%台にまで減少しました。HIV 検査の受検者は現在の自分の感染状態を知らない人々であります。繰り返しますが、HIV 陽性であるけれどもその事実を知らない陽性者が多いほど、彼らから陰性者への伝播が多くなり、感染は拡大すると予想されます。今年のデータはその伝播の可能性が以前より格段に減じたことを示しています。

この成果をもたらしたのは検査の普及です。実際、今回のキャンプで検査を勧めたけれどもお断りになった 170 人のうち、111 人（65.3%）もの多くの人々がすでに HIV 検査を受けていましたし、受検した 320 人のうち 243 人（75.9%）がこれまでに検査を経験された人々でした。この村では驚くほどの速さで HIV 検査が普及していることが理解されます。未来は明るいと思われますし、これまでの RUNELD と私たちの活動にはそれなりの意味があったと考えられます。

これまでの診療数

	診療患者数	HIV検査 (陽性率)	マラリア検査 (陽性率)
2010年	897	46/203 (23%)	
2011年	900	28/193 (15%)	11/106 (10%)
2012年	1113	30/188 (20%)	45/145 (31%)
2013年	1345	38/193 (20%)	79/191 (36%)
2014年	1924	52/332 (16%)	88/246 (36%)
2015年	1619	18/320 (5.6%)	71/285 (25%)

2つ目は井戸の事です。既に第1期工事でパイプは地下193mの水脈に到達しました。第2期工事で、井戸水を貯めるタンクと水をタンクへ汲み上げる電動ポンプが造られる予定です。このニュースレターが配られる頃にはそれらが完成し、クリーンな水の使用が可能になることでしょう。工事会社の社長は私に水質検査の結果を見せましたが、全く問題なく、飲料水としても使用可能で、ゲム村の人々の衛生状態は格段に向上することは間違いないと思われます。第3期工事は、近くの学校とマーケットにキiosk（小屋）を建て、そこにパイプを導き、より多くの人々に水を供給できるシステムを構築することですが、これは来年の仕事になるでしょう。2009年の調査旅行の時に村の人々やパパが念願していたクリーンな水の供給が、もうじき実現することになります。ご寄付をくださいました多くの方々に感謝申し上げます。

3つ目は電線が引かれていたことです。我々は宿のある Kisii という町からゲム村にはチャーターした中型バスで通うのですが、キャンプの場所の約1km手前で電線が途絶えているのを毎年眺めてきました。これがもう少し延びればゲム村に電気が通ずるのに、と毎年思ってきたのです。今年は電線がゲム村まで延びているだろうと思っていたのですが、キャンプ初日にバスの窓から電線を追っていると、残念なことに毎年と同じ光景で、電線はいつものポイントで途絶えていました。パパがこの1年の間に電気を使えるようにする、と言っていたのに、本当にがっかりしました。しかし、数分後、つまりキャンプの入り口に着いた時、電線が別の方向から引かれているのを発見しました。失望感に捕らわれていただけに、驚きと喜びは倍増しました。これでコミュニティセンターが医療活動のできるヘルスセンターに昇格できる基盤が確立されたことになります。村人の希望が実現手前まで来たことになります。

4つ目は、澤崎さんのお陰で Kisii の病院との連携が取れそうになったことです。医療キャンプの前日、私たちのチームは3班に分かれ、それぞれ別の仕事を分担しました。1つ目のチームは翌日からのキャンプの準備（薬の整理など）、2つ目のチームはダグラスの故郷であるアセンボでの医療活動、3つ目のチームは現地の医療施設の見学です。3つ目のチームがこの地区の最高レベルの病院の見学をしたのですが、その病院のトップと直接会話し、今後密な連携を取ろうということになりました。私はアセンボに行きましたので病院見学はできませんでしたが、多くの見学者が感動してその日の出来事を私に話してくれました。単にアサンテナゴヤとの連携のみならず、日本の熱帯医学の研修や研究につながれば素晴らしいですね。アサンテナ側の窓口は東大の菊地先生です。

5つ目は、大阪地区の医療者の協力が得られそうな希望であります。この点は大阪市立総合医療センターの白野先生がこのニュースレターに書かれておりますので、そちらをお読みいただければお分かりになると思います。

毎年少しずつ小さな成果が積み上げられていますが、今年の成果が最も感慨深いものでした。多くの方々のこれまでのサポートに重ねて感謝申し上げます。



コミュニティセンターでの活動（2年目）

薬局担当 渋谷 伸子

私にとってケニア、ゲムイースト村での医療キャンプ参加は今回で4回目となりました。今年のキャンプに関して薬剤師としての工夫・所感などを綴ります。

昨年完成したコミュニティセンターは鍵をかけることができるため毎朝薬剤を持って出掛け、ホテルへ持ち帰るというたいへん手間であった荷物の移動が無くなりました。ただ勝手がわかっていなかった昨年はキャンプ初日に薬剤のほとんどを持ち込むのと同時に預けていた前年の薬剤を現地で受け取ってしまったため逆に荷物の量が多くなってしまい、到着してから薬剤を整理して配置するのに時間がかかり調剤開始の時間が少々遅れてしまうという反省点がありました。そこで今年はキシイに到着した日に預けていた前年の薬剤をホテルへ届けていただき、日本で購入した薬剤、ケニアで購入した薬剤、前年の薬剤を全てホテルで整理しセンターの薬局割当の部屋に入ると思われる量の薬剤を初日に持ち込みました。そのやり方により、今年は調剤が診療開始に遅れることなく開始することができました。

薬局スタッフは3人でその内薬剤師は私一人でした。調剤経験のない2人にもすぐに調剤に慣れただけのようにと昨年と同様に薬剤を五十音順に並べ、少々複雑な小児用量に関しては事前に小児科の飯田先生と打合せをして簡易表を元に調剤する方法にしました。そして実際の調剤は2人にしていただき調剤薬鑑査（最終チェック）を私が行いました。調剤では患者さんのために薬袋に用法用量、疾患名、薬効などを英語で簡単に記載します。昨年はその英単語がわからない時はその場で辞書を引くことがありそこが大変な作業でしたので、今年は事前に英語の疾患名・薬効を一覧表として作成しました。

患者さんへの服薬指導は全てケニア人ボランティアが対応してくれました。薬局担当のケニア

人スタッフは3人（Carib、Isabel、Beatrice）でしたが、その内2人は昨年も薬局担当だったので、私が何も説明しなくても全てを把握し、スムーズに業務をこなしてくれました。薬局では4年前からカルテ・処方箋を預かった時に整理券（カルテID 番号記載）を渡すというシステムを導入していましたが、今年はカルテID 番号以外に患者さんのお名前を整理券に記入していました。彼らが昨年までのやり方に改善が必要であると感じて今年はそのようにしたのだと思います。ドクター達の診療が進むにつれてどんどん処方箋が山のようになっていきます。それを私たちは一枚ずつ調剤していきますが、薬を待つ大勢の患者さんの対応を彼ら3人が臨機応変に対応してくれてとても助かりました。

今年の薬局スタッフの鈴木さんと岩田さんも初日は大変だったと思いますが、すぐに慣れたようです。また手の空いたドクターも代わる代わる調剤のヘルプにおいでいただき心から感謝しています。処方箋が多かった3日目は5時を過ぎたあたりから部屋の中が暗くなりだし懐中電灯で作業を進めていましたが、その時に部屋の電灯がつきとても感動しました。

こうして今年も受診者が多かったにも関わらず、診察を受けたその日に薬剤を患者さんにお渡しすることが出来ました。またキャンプ全体としての新しい試みであった「検査結果を即日伝える」も成功しました。これらが達成したことで、



受診した方は再度翌日に来て頂く必要はなくなりました。

診察、検査、薬剤の受け渡しがスムーズとなり毎年毎年の進歩には充実感を覚えます。その一方で、ゲムイースト村のみなさんも診療を受けることには慣れてきたようですが、薬剤師の立場としてはいろいろと心配になることがあります。例えば用法用量通りに服用しているか、兄弟で薬をもらっている場合は自分のものをきちんと服用しているか、外用剤を誤って飲んでいないか、もらった薬を服用しないで他人にあげていないか、正しく服用したとしても副作用が出ていないか、老眼鏡に至ってはお金に替えていないか（老眼鏡は毎年大人気で、なぜか10代の若者まで欲しがります）、など。これらの心配に対する対応は来年の課題です。そして来年は服薬するための水はみんなの寄付で作った井戸からであることを期待します。

薬局は調剤がメインのため患者さんとお話することがほとんどありません。また診療の最後にあたるため薬局の作業が終わったと同時にホテルに帰ります。ということで日本人ボランティアメンバーの中でケニア人との触れ合いが一番

少ない部署ではありますが、行き帰りのバスの中から見るケニアの景色を楽しんでいます。ただただ広い畑、大勢の子ども達の元気な様子、自分もちっちゃいくせに弟妹をおんぶや抱っこしている子ども達、真っ赤な夕日が沈むところ、長年建築中だった高層ビルの低層部分だけのオープン、日本とは違う何もかもで心の洗濯をさせていただきました。そしてご一緒させていただいた皆様との濃密な時間は日常では得られない貴重なものです。

毎年旅の最後に皆さんと写真の交換をします。帰国してからその写真を見ると仕事の分担の関係で自分が行かなかったアセンボ村の様子、キシイの病院の様子を拝見でき、一緒に行った気になります。そしてキャンプ中のみんなの仕事に取り組む真剣な顔、ケニア人の子ども達に負けない満面の笑顔、それらを見てとても充実していたケニアの日々を思いだし胸が熱くなります。

今年もケニアのゲムイースト村における医療キャンプ活動に参加し貴重な体験をさせていただいたことに心より感謝申し上げます。アサンテナゴヤの皆さま、一緒に参加した皆さまには本当にお世話になりました。

寄稿文

岩田有里波（医学部4年生）

この度縁あってアサンテナゴヤの今年の医療キャンプに参加させていただくことが出来ました。これは私にとってはとても幸運なことでした。

ケニアでの日々は長いようであつという間です。

「ここがケニアかぁー」と感慨にふけているうちにみるみるキャンプの準備が進められ、キャンプ当日にはたくさんのゲム村の人々と現地スタッフに囲まれている間に1日が過ぎていきました。キャンプ中の5日間は、薬局（私の持ち場でした）に並ぶたくさんの患者さんのプレッシャーと、立ちっぱなしによる足のしびれと、急いで食べたお

昼ごはんの記憶くらいしかなく、常に目の前のことに必死でした。それでも、私には本当に充実した時間でした。はじめ、貴重な夏休みを消化してまでケニアにボランティアに来るみなさんはなんてすごい方々なんだと思っていましたが、それは少しだけ違っていました。（もちろんみんな優しくて温かいすごい人達であることには変わりませんが）自分が実際に参加してみて、このキャンプがただの慈善活動以上にとっても有意義で楽しい日々なので、どんなに忙しくても、疲れても、来ようと思



えるものなのだということがわかりました。

私は、ここで出会った日本人・ケニア人含め多くの人々からたくさん刺激をもらって帰ってきました。

私事ではありますが、日本に帰ってきてからの大学での勉強への熱意もそれまでよりほんの少し上昇したように思います。

あまりお役に立てず、むしろご迷惑をお掛けしたことのほうが多いようにも思いますが…是非また参加させていただきたいと思いました！

最後に一点。個人的には薬局をしていて、先生の診断を受けたケニアの方たちがどれほど正確に薬を服用してくれているのかがとても気になりました。みんなちゃんと飲んでいてくれるのか、何種類も処方されている人は飲み分けられてい

るのか、副作用等でてはいないか、目の回る忙しさの中でもその思いはずっと頭にありました。できることなら、菊地先生が提案されていたように追跡調査をして経時的にその人の症状を追っていったらいいなと思います。そうすれば、昨年処方したお薬でその人の症状がどの程度改善されたのかを確認することが出来ます。

本当は、患者さんのお家まで付いて行ってその人に1日付きっきりでいたいくらいなのですが。

最後に、このキャンプを通して、本当に多くのものを得ることが出来ましたが、その中でも一番は地球の裏側にできた友達です。

彼らが健やかに暮らしていけるよう、今後も小さなことでも手伝ってあげたいと思っています。

2015 年度ケニア医療キャンプに参加して

坂田 侑平

私は現在大阪の中心地、梅田に近い 1000 床を超える大病院で消化器内科医として仕事をしています。担当する患者は癌、胆管炎、膵炎、肝炎など。日々の診療で消化器疾患以外は基本的に診ることはありません。内視鏡や CT、MRI、PET、ERCP など最新機器や技術を駆使して日々診療にあたっています。将来私は内視鏡治療専門医として励んでいきたい、そんな風に思っています。そんな私も正反対とも言える目標がもう一つあります。それは海外の医療過疎地域で医療活動を行うことです。きっかけは学生の頃の海外留学先で様々な国から来た留学生と出会ったこと。医療も文化も歴史も日本で自分が考えていた尺度では測りきれない世界があることを知り、世界に貢献できる仕事がしたいと考えるようになりました。その頃から海外での医療活動が一つの夢になったわけです。

そんな思いを持ちながら 2013 年に医師免許を取得し現在の病院で働きだした私でしたが、アメリカの医師免許はないしもちろんすごい研究を

してるわけでもない。当時研修医の僕は何ひとつ一人前のことはできません。でも私は子供の頃から誕生日まで誕生日プレゼントは待てないし、お腹がすいたら食事の準備ができるまで我慢できないし、そんなことと同様に一人前になってから海外医療活動始めるなんて待ってられなくて、色々 google で調べまくった結果、当院感染症内科で研修していた時に無理を言って別団体でミャンマーでの医療活動に参加しました。その時、そんな医療活動に興味があるならばと、当院感染症内科の白野先生にお誘いいただいたことがきっかけで、今回アサンテナゴヤのケニア医療キャンプに参加させていただくことになりました。白野先生、本当にありがとうございます。

前置きがかなーり長くなりましたが、そんな経緯で参加させていただくことになった私は出発日である 9 月 11 日が来るのをずっと楽しみに待っていました。「ケニアって大丈夫？」「エボラは流行ってるの？」「テロとかないの？」と周囲の人には心配されました。私自身アフリカ上陸が初めてで心配がないわけではなかったですが、割合で言うと不安:楽しみ=2:98 ぐらいだったので、

私の心配はほとんど楽しみの波にかき消されました。ちなみに不安の2の内訳の一つが治安、もう一つは検査がほとんどできない中できっちりした診療ができるかでした。

ケニアのことをインターネットで調べて本を見てイメージして、いざナイロビに着いてみると、「ごくごく普通の日常が広がる場所！」という感じでした。初めての国を訪れるときはいつも同じ感想を抱きますが、どんな環境かわからない不安からなのかいつも警戒して悪く考えてしまうものですね。当たり前の話ですがケニアにも人々の日常生活が溢れていました。

とはいえナイロビにはたくさんのスラムがあり、犯罪は多く、毎日の生活が命がけという人々が多いのは事実であり、現地の **Child Doctor** スタッフや **JICA** の方々からそういった話を聞くとケニアの現状の厳しさを強く感じました。建設中のビルがたくさんあり、道路は日本車だけで、他の発展途上国同様に急激な経済成長を肌で感じましたが、そういった経済発展の裏につきものである格差の拡がりもまた他の国同様に感じました。

ナイロビでそんなことを考えながら私たちは翌日、日本から輸入されたマイクロバスでデコボコ道を駆け抜け、グレートリフトバレーの雄大さに感動しつつキシイへ到着。

その翌日はヘルスセンターの見学でした。現地の医療制度の説明をしていただきながら日本で言う診療所レベルのヘルスセンターをまず見学させていただきましたが、診療所に医師は常駐しないということには驚きました。日本では医師不足という言葉をよく耳にしますが、日本の医師不足以上のことがケニアにはあるようでした。そんな環境の中では看護師、検査技師、クリニシャンなどコメディカルの方々の活躍が非常に目立ちました。

さらに菊池先生の発案と澤崎さんの素晴らしい交渉力で、予定にはなかった **Level5** のヘルス

センター(日本で言う中核病院)の見学もさせていただくことができました。日本の **ODA** の援助により建設された病院です。ここにはアポなしで飛び込んだにも関わらず、なんと同地域の保健大臣との面会もさせていただくという、思ってもいないおもてなしをしていただきました。時間も限られており今回は短時間の病院見学となりましたが、保健大臣からも「コラボレーションしたい」という言葉をいただきました。今後も同病院と連絡を取り合い、ゲムイースト村での医療キャンプに加えて同病院での何らかの活動ができればという話にもなりました。来年度以降、この病院で何らかの勉強ができれば貴重な経験になることは間違いないと思っています。

9月15日からはいよいよ医療キャンプの開始。「このマイクロバス、こんな道を走る想定なんて絶対してないんやろなあ。」と思ってしまうデコボコ泥道を1時間弱、道路の横で無邪気に手を振る子供達に癒されながら、華麗なドライビングテクニックで走りやってきたゲムイースト村は、キシイのゴミゴミした喧騒を忘れてしまう、緑に囲まれた穏やかな土地でした。土壁の家が並ぶ中で、数年前に建ったと聞いたコミュニティセンターはとても立派なものでした。

診療開始を告げるパパの熱いスピーチに身が引き締まりました。朝から行列をなす患者さんは途切れることなく次々やってきます。カルテに書かれた愁訴は、

『腰痛、胸痛、咳、物が見えにくい、食欲がない、膝痛』

「多すぎ！！どれが主訴やねん！！」

いわゆる不定愁訴を訴える方が半分以上です。病気を探そうと診察をしますが、診察待ちの行列を見ると **NHK** ドクターG ばりの問診なんてやっける暇もありません。確信もなく抗生剤を出したり、カロナールとビタミンを出すが続いていると、なんだか自分がヤブ医者になったみたいでちょっとした「ほんとにこの人たちのためになって

るのかな？」ってふと考えることもありましたが、それでもたくさんの方の中からたまたま HIV 検査陽性がみつかったり、マラリア陽性がわかったりすると「少しでも役にたてて良かったな」と少しホッとしました。発熱や軽い咳嗽、倦怠感だけでもマラリア検査を出してみると案外陽性だったのには驚きました。初日の診療後に「けっこうマラリア検査出したら陽性になるよ」とアドバイスをいただき、2日目以降積極的に検査を出すようにしたので、初日は何人かマラリア患者を見逃していたかも、というのが今回の反省点ですね。



5 日間の医療キャンプを通じて感じたことをまとめてみます。

HIV やマ

ラリアを始めとして肺炎、心不全、鼠径ヘルニア、1型糖尿病疑いなど患者に良い影響を与えられたと思うことも少しありましたが、9割以上の方に対してはたった1回の問診と身体所見だけの診察でどれほどの貢献ができたのかはわかりません。医療の性質というか、何を目的とするかはその土地その土地で異なります。頭ではわかっているでも実際にやってみると、やはり紹介ばかりの患者を診る大阪の大病院とは全く異なることを痛感しました。

コロナールで腰痛は治りません。ビタミンで体調は良くなりません。大事なものは影響を与え続け

ることです。今回の1年に1回きりの医療キャンプで影響を与え続けることができるのは、HIV 検査で陽性を引っ掛けること、そして1次予防の教育です。そういった意味で HIV 検査と共に、石鹸での手洗いやコンドーム使用の啓発、JICA の方の歯磨き講習はこのキャンプで最も意味があることではないかと感じています。

予防と言えば、ゲムイースト村では井戸が掘削されきれいな水を各家庭に供給する準備ができつつあると聞きました。また、HIV 陽性率はここ数年で激減したという報告もありました。年に1回、5日間のキャンプではありますが、着実に状況は改善されてきていることを感じますし、それに少しでも貢献できたなら大変嬉しく思います。これからも引き続き現地に赴き貢献できたらと考えています。

そして近い将来、ケニアも日本同様に生活習慣病や悪性腫瘍の早期発見が課題になってくるのでしょうか。と思って今回、外来診療をした患者さん 80 人にランダムに血糖測定を行ってみました。空腹時血糖 126mg/dl 以上の方は5人でした。80人中 64 人は畑仕事をしているのに、5人は全員デスクワークか無職です。興味深い結果でした。

最後になりますが、長きに渡ってアサンテナゴヤの活動の運営に携われた全ての方々に敬意を表すると共に、内海先生はじめ今回、現地でお世話になった方々、様々な形で日本からサポートしていただいた多くの方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

ケニアでの医療キャンプを経験して

浜松医療センター 臨床検査技師 坂口 実悠

高校生の時英語の授業で医療ボランティアの話聞いてから、いつか自分もこういった経験をし

てみたいとずっと思っていました。同じ病院のドクターがケニアでのボランティアに参加していたことを知り、坂光先生を通してアサンテナゴヤのことを紹介して頂いて今回その夢が実現されることとなりました。



観光目的の海外旅行は何度か経験していましたが、ボランティアとして、しかも発展途上の国に行くのは初めてだったので、出発直前まで不安ばかりでした。しかし現地に着くと、これまでのアフリカのイメージが大きく変わりました。都心では高層ビルが立ち並び、車の大渋滞が起っていたかと思うと、広大な砂漠地帯が広がり、ライオンキングに出てくるような動物が普通に見れたり、沢山の緑に囲まれた景色に変わったり・・・毎日新しい発見があり、とにかく楽しかったです。医療キャンプでは、検査技師として HIV と梅毒の迅速検査を行いました。普段の業務では行っていない検査で、さらに日本のように遠心機があることが普通であれば簡単に血清でできる検査も、遠心機がなければ電気も通っていない中では全血で検査するしかなく、判定もしにくくなるので、慣れない環境で少し苦労した部分がありました。しかし数を重ねるうちにだんだんと検体の扱いや検査の特性などが掴め、日本の日常業務では味わえないような検査技師のあり方や検査の考え

方を学べたように思います。そして、昨年度まで検査結果を翌日に報告していたものを、当日報告とすることが、今年度の新しい試みでもありました。待ち時間が長くなってしまい、患者さんや他部署に負担がかかってしまったことはこれからの課題となる点であると思いますが、ほぼ全員の患者さんにその日のうちに結果を伝えられることが出来た事は、次に繋がる大きな一歩ではないかと思います。

検査結果としては、HIV 陽性者も梅毒陽性者も思った以上に少なく、アサンテナゴヤの医療キャンプの積み重ねによる成果が実感できるものでした。

自分の病院よりも最新の設備を整えているところを見る機会があっても、自分の病院よりも劣っているところを見ることはほとんどないので、今回のような測定する機械もなく、電気も通っていない場所での検査技師の役割は本当に限られてしまうことに、無力さを感じたりもしました。しかし、その状況でどうしていくのがベストなのかを考える機会は、日本の検査室にこもっているだけでは湧いてこないことだと思うので、今回の経験を今後の業務に役立てていかなければならないと思います。同時に日本がどれだけ恵まれた国であるかということをも身に染みて感じました。今回初めての参加で、自分がその環境でやっているのか不安ばかりでしたが、何事もなく無事キャンプを終えることが出来たのは、一緒に参加された皆様とサポートしてくださった皆様のお陰です。とても良い経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。また機会があればぜひ参加したいです。

2015 年度無料医療活動に参加して

日比野 福代

今回、採血担当で5回目の参加をさせていただきました。ケニアに着いて、翌日はナイロビからマ

イクロバスでキシイへ走った。雄大なケニアの大地とリフトバレーを見ながら、日本では見ることのない場所にきたことに感謝しながら、日本と同じような気候を感じながら、まる1日のバスに乗

りキシイに着いた。ホテルの会議室にトランクの物を持ち寄ると一杯、皆のトランクにこれだけの物を詰め込んできたんだと思うと驚くほどである。

翌日はアセンボ訪問組、ヘルスセンター訪問組、活動準備当番組、私は毎回参加しているためキャンプの準備で薬の分包、採血準備などを担当した。

本日より医療活動開始、ゲム・イースト村へマイクロバスで約1時間揺れながら到着、昨年同様新しくできたセンターの建物が周りとは違う雰囲気であつた。電気はすぐ近くまで電柱はあるが、村にはまだ電気がきていない。センターは自家発電で作動していた。井戸も敷地内にできていたが動いていない。早速、セレモニーが始まり活動開始、採血担当で HIV の採血とマラリア検査をする。マラリア検査は 20 分後に結果は出るため担当医師まで患者とともに報告で忙しい。今回 HIV 検査は即検査をして1時間後は患者に告知してヘルスセンター、VCT 等への紹介状を渡す、この一連の流れを、今回スムーズにできたのは、昨年までは翌日告知だったのが、検査技師の参加で当日告知することが可能となった。

1 日目は受診者がそう多くなくスムーズに終わった。2 日目からはまずまずの数で、かといって休む暇なく採血担当は忙しい。現地のボランティア、日本の JICA の方々が毎日参加していただき、ルオ語の通訳をしてもらい、私たちも現地ボランティアに指導を受けながらルオ語をジェスチャーも交えながら少しずつ覚えていった。3 日目になると、現地ボランティアの方々が日本語を覚えるためメモを取りながら発音してくれる、お互いに言葉を覚えながら、楽しみながらよく働いてくれる。JICA の人たちが、こんなに働くケニア人は珍しいとほめていた。毎日午後になるとスコ

ルがくる。風の流れが変わり雲が出たと思うと凄い雨となる。帰りの車は大丈夫かなと思いつつ雨の止むのを待つしかない。4、5 日目になると、お互いに次の行動が読めてスムーズな動きができた。

前年アンケートをとり、歯磨きは1日1回が大半を占めたため、前年度、参加された菱田先生より 300 本の歯ブラシを寄付していただき、JICA の方が紙芝居方式で歯磨き指導をしてもらい、子供も大人も大好評だった。

最後はエリアスさん宅でお別れパーティーでホテルのシェフ料理をいただき最後のお別れをしながら、ゲム・イースト村を後にした。

キシイからナイロビに帰路途中ナイバシャのサファリー見学と溪谷ウォーキングをしてナイロビに到着した。ナイロビのホテルで医療活動と一緒に行動してくれたダグラスとお別れした。ナイロビでは奨学金の援助にと JICA の方々の T シャツをほとんどの人が購入した。

日本に帰る日はチャイルドドクター見学とお土産物を購入して空港へ、空港では軽くなったトランクを運びながら、今年も無事に終わることができた。準備から最後までアサンテナゴヤの皆さまの応援があり、参加できたことに感謝します。



少しずつ、確実な歩み

石川美里

初めての村を訪れたのは、2011 年 9 月。

日本から約 30 時間、ナイロビで国内線に乗り換え、夕方できたてのキスム空港に到着。建物には、まだかすかにペンキのにおいが残っていました。

そこから3台のワゴン車に分乗しキシまで3時間の移動。真っ暗の中、車を走らせていると1台の車がパンクしました。その時見た夜空は、とても美しく星の近さを感じ、遠いところまで来たと実感した瞬間でした。それから、4回



この地を訪れる事ができるとは想像していませんでした。

キシのホテルから村までは、メイン道路A1からスネカという街の三叉路を曲がり、しばらくすると、相変わらずの無舗装。今では、ガタガタ揺られていると“そうそう、この感じ村まで後少し！”と思うようになりました。変わらぬ景色と、この道路に“またこの村にこれた”と最初に訪れた時の事を思い出していました。

初参加した2011年のキャンプ時、マーケット向かい側の原っぱに大きなテントとおしゃれをした村の女性達が、歓迎の歌とダンスで迎えてくれたこと。テントは、人々の熱気で熱くなり、暑さとの戦い。村の人達が心を込めて作ってくれたもてなしの料理のこと等々。。。懐かしく思い出しました。翌年、マーケットから徒歩で5分ほどの所、現在の場所にかわりました。それから建物の建設計画からはじまり、今年は井戸が工事中でタンクの設置場所も決まっています。電気は、診療所付近に電柱があり、建物の配線工事は終了。残念ながら建物へは、送電されていません。

ある日の夕方、発電機を使って灯りが灯された時は、大変うれしく思い忘れられない瞬間でした。電気・水道の無い場所から“ある場所”に変わろうとしています。この工事が、日本だったら“あっ”という間に完成していることでしょう。

ここはケニア。そして、都会から遠く離れた山のなかの農村。ゆっくりと確実にかわっています。

何もなかった原っぱに建物ができ、近く井戸も完成するでしょう。電気も近くまできています。この地に念願のケニア人医療者が、忙しく働く日が早く来ることを願うばかりです。

キャンプは、今年もたくさんの人が思い思いのおしゃれをし、診療開始を心待ちにしていました。今年は、初の試みでHIV検査の結果を当日知らせることになりました。今回私の担当は、検体を採血から受けとり検査に渡し、結果のカルテと患者さんを告知担当医まで連れていくこと。それを聞いて、私一人では患者さんを探せないと思っていました。それは、待合所に指定したテントにいるとは限らないなあ。。んーどこに人があつまりやすいのかなあ。。。実際始まってみると、居心地のいい場所に彼らは集まっています。腰掛けられる場所と日陰になるところ、椅子がなければ敷物を引いて座わり井戸端会議。お昼寝したりして待っていてくれました。そこにいなければ、鍼灸待ちか薬局付近。その時々で工夫しながら、5日間を無事終え“ホッ”としました。そこには、いつもルーネルドのメンバーがいて、私に困ったことはないか気にかけてくれ、探していた患者さんをみつけてきてもらい、ずいぶんと助かしました。そして、村の人達(患者さん)にもたくさん助けられました。私のかわりに大きな声で番号を読み上げてくれたり、番号を持っている人を教えてくれました。私がBi(来て)とルオ語でいうと特にご年配の方達は、ニコッと白い歯をみせます。一言ですが、なにか通じ合うものがあり存在がちかくなったようで、その笑顔に何度となく励まされ、ほっこりした気持ちになりました。

もう一つ初めての事がありました。要望の高かった歯ブラシを配ること。歯磨き・手洗い指導は、JICA隊員が子供や大人達に丁寧に指導していました。一人の年配のご婦人が、歯ブラシを上手くつかうことができず、隊員の方がマンツーマンで優しく丁寧に教えてるのを見て真心を感じました。忘れかけていたように思い、丁寧に誠意をも

ってこなさなければと思い直す瞬間でした。日頃の啓発活動、医療支援活動が根付いてきていることを随所に感じる事が多くなったように思います。

ルーネルドスタッフも回を重ねることで、スムーズに的確に対応していました。

どんなことでもそうですが、継続することは決して簡単なことではありません。言葉も文化も違う遠い国ケニアと日本。お互いを理解しよりよい

関係を築いていることは、とても素晴らしいと思います。回を重ねたぶんだけ実りはおおきく、確実に歩み続ける力と誠意を感じることもできる素晴らしい時間でした。

ルーネルド、アサンテナゴヤに関わるすべての皆様ありがとうございました。キャンプにご一緒頂いた皆様、いろいろな場面で支えていただきありがとうございました。Many thanks!

アサンテ ナゴヤ医療キャンプ2015に参加して

澤崎 康

今年も昨年に続き、アサンテ ナゴヤの主催するゲームイーストでの医療キャンプに参加させていただきました。今年も昨年に引き続き受付の担当です。

私は自分がケニア人たちと行っているプロジェクトのために、日本からの参加者の皆さんよりも前にケニア入りして現地から参加したため、ほかの参加者のみなさんからは、私がケニア在住者と思われていたようです。実際に自分がケニアにいたのはみなさんよりも前後少し長くいただけなのですが、2011-13年のHIV/AIDS対策のJICA専門家としてケニアに2年間滞在して以来、すっかりケニアづいてしまっているようです。

医療キャンプの方は昨年より、アサンテナゴヤの篤志により出来上がったコミュニティーセンターの場所を使っただけのサービス提供のおかげで、飛躍的に多くの方を受け入れることができました。今年もできるだけ多くの方にサービスを提供したいという思いから、受付ではできる限り効率的に受付を行うことができ、その結果多くの人を、診察室に「患者さん」を届けることができました。しかしいくつかの課題・反省点も見えてきました。

まずその一つは、受付で多くの人をスムーズに受け入れても、実際には診察室の前での列ができ、そこからそれぞれのドクターの診察テーブルへの割り振りについてです。昨年は優秀なケニア人

スタッフの「司令塔」がいて、その人により効率よく整理して案内していたのが、今年の現地担当者は出たり入ったり、携帯のチェックに忙しかつたりで必ずしも効率よく整理とはいかなかったようです。さらに2-3日目は青年海外協力隊(JOCV)のスタッフに援護してもらっていたのが、歯科指導などの他の部署に回ったりし気配りのきく日本人スタッフも不在になって、結果的に一時担当者不在になったりしてしまいました。しかし4-5日目には、ほかの優秀なJOCVスタッフに入っただけ、彼女らの気配りで大幅に改善されました。

もう一点、課題としては、いくら受付でスムーズに多くの人を受け入れても、診察室からは受診者が検査などの次の段階に回ってきても、今年は即日検査結果通知としたため、検査に多くの滞留者がでたり、また受付が午後2時前に最後の受付をしても、薬局での最終の薬の引渡しに5時近くになったりということがありました。スタッフ全体のキャパシティや流れを把握することが必要と思われました。(もちろん「即日検査結果通知」は、

特筆すべき良いサービスですので、だから



とって、これ自体は是非今後も続けて行っていたきたいサービスです。)

それでも初日から最終日前日までは、希望者のほとんどを受け付けることができましたが、最終日の土曜日は150名を目処にということで受付をしたので、実際には午前10時半に150名を超えた時点で、多くの受診希望者を残し敷地のドアを閉めざるをえず、がっかりする人々を前に「受付終了」をお伝えするのは本当に気の毒な思いをしました。最終的には先生方の了解のもと、重症の方、高齢者や乳幼児など十数名を追加で受け付け、結果的にはできるだけ多くの方への効率良いサービスが提供できたと思います。

今回、キャンプ開始前の打ち合わせで、明らかに必要性のない人はお断りすることがありうる、ということが話し合われました。実際に受付では、老眼鏡をもらうことを目的とするエリアス神父

さんの友人で、我々にはおなじみの「先生」はともかく、それ以外で「元気な」ティーンエイジャーなどの兄弟や友人などが来ていて、愁訴を聞くと「頭が痛い」とか曖昧なことだけという場合があります。よくよく聞いてみると、ケニア人関係者の親が子供にこれを機会に、とにかく「検診」を受けさせておくため連れてきていたケースなどがありました。

いずれにせよ、現地ではもはや恒例となった医療キャンプのサービスが、多くの人びとに様々な形で期待され、年に一度のなくてはならない信頼できる医療サービスとなってきたことを強く感じました。あとはこれらが一年に一度の短期間だけのサービスだけではなく、出来上がった施設を有効活用し、いかに平素からコミュニティーに対し、良いサービスができるかということが今後の大きな課題のようです。

無料医療キャンプ2015を終えて

看護師 鈴木 泉

無料医療キャンプへは、2013年に続き、今回2回目の参加となりました。2013年の医療キャンプはテントの中での活動で、スコールがくればテント内は水たまりだらけ、蒸し暑いテント内では熱中症になりそうと、不慣れで過酷な環境での活動は大変でした。テントの横ではコミュニティーセンターの建設が始まったばかりで、どんな建物が建つのか想像もできませんでした。今回の医療キャンプは、コミュニティーセンター内で活動ができること、そしてNPO RUNELDのMr.ダグラス



の故郷であるアセンボでの初医療活動に代表参加することにワクワクしながらケニアに入

りました。

アセンボへはキシイから車で往復8時間以上かかり、移動だけでも相当な体力が必要でした。ゲム村よりも暑く、サボテンが多い乾燥した気候。診療はMr.ダグラスの実家の庭で、木陰に小さなテーブルと椅子を置いただけの所。木陰とは言ってもほとんど日に照らされた状態の中で、私は診療補助や、薬の調剤を行いました。事前に診療時間や患者数を決めていましたが、実際は診療時間を延長したにも関わらず暑い中待っていた患者を全員診ることができませんでした。また持参した薬の種類や数も少なく、一部不足もしました。今回は初めての活動で、態勢が不十分だったのは確かです。ただ、小さなワゴン車一台通るのもやっとな道では同行できるスタッフ数も限界があり、すべての物品を運搬するのも難しいのは事実です。キシイからかなり距離もあり、今後活動を続けていくには多くの課題があると思いました。

初めてコミュニティーセンターを見た印象はとにかく「すごい！」でした。予想以上に広く、テン

トの時に比べると清潔で室内は涼しく、とても快適だったので、集中して仕事に取り組むことができましたと思います。今回は初めて薬局での仕事に従事しました。看護師という仕事柄、処方箋をみたり薬を扱ったりするのは慣れていましたが、手順や要領をつかむのには時間を要しました。その日のうちにすべての処方箋を調剤しなければ終われないので、日が暮れかけて灯りの下で調剤した日もありました。1日立ちっぱなしで仕事をしているので肉体的に疲労を感じましたが、ずっと薬がもらえるのを待っている患者や現地ボランティアも頑張っている姿、また子供達の笑顔を見て

は励まされ、何とか5日間の活動を無事に乗り切ることができました。

時々ケニアの子供たちの笑顔を思い出します。あの純粹で素敵な笑顔は私に元気をくれます。医療キャンプに参加することは、ケニアのためでもあります、自分にとっても大きな意味があったとつくづく思います。

最後に、医療キャンプのボランティア、JICAスタッフ、今回参加したメンバーの方々、そしてなにより活動を支援してくださる皆様のおかげで貴重な体験ができた事を感謝いたします。

初めて無料医療キャンプに参加して

大阪市立総合医療センター 感染症内科
白野 倫徳

私は今年初めて、ケニアでの無料医療キャンプに参加させていただきました。アサンテ・ナゴヤの皆様方と交流を持つのも今回が初めてですので、まずは自己紹介をさせていただきます。

平成14年に愛媛大学医学部を卒業したのですが、学生時代はへき地医療に興味があり、医療系サークルに所属し、愛媛県の農村地域でフィールドワークを行いました。この経験が、住民の生活背景にも焦点を当てるべき、という今の診療スタイルの屋台骨となっています。また、寄生虫学教室に出入りし、マラリアワクチン開発の研究にほんの少しだけ関わらせていただきました。タイとミャンマーの国境地帯のマラリア流行地へのフィールドトリップにも参加させていただきました。卒業後は、大阪市立総合医療センターで初期研修の後、同センター感染症内科で HIV 感染症／エイズ、輸入感染症などの診療に取り組みました。途中、大学院で院内感染対策や地域での耐性菌対策などの臨床、研究に取り組んだ後、大阪市立総合医療センターに戻りました。診療の他にも、大阪を中心に HIV 陽性者の支援や滞日外国籍住民の支援を行う非営利活動法人で活動しております。

そのようなバックグラウンドがあったため、HIV 感染症／エイズやマラリアの診療の機会がある本キャンプへの参加はかねてからの念願でした。今回の診療を通じ、例えば腰痛、背部痛を訴える人が多くいましたが、ほとんどの人が農業で生計を立てており、作業により慢性疼痛を来していることは明らかでした。それに対して痛み止めや湿布しか処方できない自分にはもどかしさを感じましたが、鍼灸で痛みが軽減した方が多く、大きな救いとなりました。

あらかじめお聞きして予想していたよりは HIV の新規陽性者の方が少なかったのですが、検査を受けなかった方に理由を尋ねたところ、「最近受けて陰性だった。」「すでに陽性で薬をのんでいる。」というように自分のステイタスを知っている方がほとんどであり、本キャンプのこれまでの成果が確実に根付いていることを実感しました。

さて、井戸が完成し安定した水が供給されたとなると、診療にも大きなメリットとなることが期待されます。発熱や下痢で脱水気味の患者さんに「水分をしっかりとってください。」と勧めておきながら、きちんと煮沸した安全な水でなければ余計に感染症のリスクを増すことになり、診療中に悩みました。

そして井戸の完成により私が可能性を感じてい

るのは、顕微鏡を使用した診療です。染色用試薬や顕微鏡は何とか調達できるとしても、染色には多くの水を要します。マラリアの診断は迅速診断キットでも可能ですが、重症度はやはり検鏡での赤血球寄生率での評価も重要です。マラリアだけではなく、原虫や寄生虫などの便検鏡、尿や痰などの検体のグラム染色、抗酸性染色などにも可能性が広がります。染色の手技や検鏡所見の解釈に



は熟練を要しますし、当然検査技師さんをはじめスタッフの負担も増えますのですぐに実現は困難かもしれませんが、井戸の完成を機に、検討してもいいのではないかと思います。

今回、私は新たに大阪から参加させていただいたわけですが、私自身、関西圏でのネットワークの中には、青年海外協力隊などで国際協力の経験がある方も多く、帰国後、それぞれの日常業務を遂行しつつも、再び海外への想いを抱いている方もいます。アサンテ・ナゴヤの活動にぜひ関わりたい、という人は潜在的に多くいると考えられますので、そのリクルートも今後の使命かと考えております。

これからもアサンテ・ナゴヤの活動に様々な形で関わらせていただきたく思います。よろしくお願い申し上げます。

エドワード

琉球大学皮膚科 内海大介

アサンテナゴヤとともにケニアの Gem East 村を訪れるのは、今回で 5 回目になりました。これまでに皮膚科医としてこの村で皮膚疾患や外傷を負った多くの患者さんたちを診察してきました。皮膚科診療を行う上で、薬剤、ガーゼやテープなどの器材などは欠かせないものです。しかし、それ以上になくてはならないものがあります。それは現地ボランティアの通訳の方々です。これまでも通訳の方に協力してもらってきましたが、どの通訳の方もみな非常に献身的で熱心に通訳の仕事をしてくれる方ばかりでした。とくに去年と今年、私を担当してくれた通訳のスタッフが非常に印象的だったので、彼のことを紹介したいと思います。

彼の名前はエドワード、Gem East 村から少し離れた村で薬局を営んでいるそうです。身長は私と変わらないくらいでさほど背は高くないが、やや太りぎみでずんぐりとしている。小さな子供が

二人いるそうで、子供の写真を小さな携帯画面から見せてくれた。最近では体重を気にしているらしく、ボランティアの内科医の先生にも相談しており、子供のためにも痩せて長生きしないといけいないな、と言っていた。体は大きいが心の優しい彼は、小さな子供やお年寄りに通訳するときとはとても優しく話しかける。また、お年寄りが立って診察の順番を待っていると、すぐにそれに気づき駆け寄り、椅子に座っている若者にお年寄りに椅子を譲るように言ってくれる。とても心の優しい通訳である。ただ、そんな優しい彼も一日の終わりにはさすがに通訳に疲れてくるのか、段々とつっけんどんになってくる。でもそれも許してあげたくなるようなナイスガイだ。

彼の素晴らしいところはそれだけではない。去年、彼が私の通訳をしてくれたとき、通訳の仕事だけではなく皮膚科診療の手伝いもしてくれた。Gem East 村で皮膚科を受診する患者さんには、外傷を主訴に来院する方が多い。その患者さんたちを治療するときにはホールの外に出て、石鹼や

水を使って傷を洗浄することがしばしばあった。好奇心の強い彼は、最初は私を手伝ってくれていただけだったが、自分も洗浄などの処置がしたいと申し出てきた。最初は簡単な処置だけをお願いしていたが、そのうちにメスやピンセットを使わなくてはならない少々難しい処置もお願いするようになった。とても太い指なのにもかかわらず、器用にメス等を使って患者さんの傷を綺麗にしてくれたのだ。少々面倒くさがりの私であつたら途中で切り上げてしまいそうな処置も、彼は熱心に最後までしっかりと処置をしてくれる。彼が処置を行ったあとの傷は見違えるくらいに綺麗になり、何日か診察しているとその傷がどんどん治っていくのであつた。ただ、あまりに傷の処置をするのに集中し過ぎて、患者さんがとても痛がっているのに気づかないこともあるのが玉にキズであつた。私も彼の熱心さに気圧されて彼を止められないこともあり、痛がっていた患者さんには少し申し訳なかったと反省している。

そんな彼は今年も私の通訳を担当してくれたのだが、彼は私に驚くべきことを教えてくれた。去年の Gem East 村でのキャンプが全て終わった後、彼が余ったガーゼや軟膏、石鹸などを欲しいというので、使わない分は全て彼に渡してきた。どうやら彼はそのガーゼや軟膏を使って、ある患者さんのかなりひどいキズを半年以上かけて治してしまったのだ。その患者さんは去年私が何日か診察した高齢の男の患者さんで、キズの状態が非常に悪く一部に骨が露出していたほどであつた。キャンプにいた間は毎日キズを洗って処置をしていたが、もちろんその期間中には治癒せず、最終日に本人に必要な薬剤やガーゼを渡して自分で処置をするようにと伝えただけであつた。患者さんが高齢だったのもあり、おそらくは治癒することは無いだろうと、とても後ろ髪ひかれる思いだったのをよく覚えている。私は全く知らなかったのだが、我々が Gem East 村を去った後から、彼はこの高齢の患者さんの自宅に定期的に通い

処置を続けたらしかった。しかも、私が渡したガーゼなどがなくなったあとも自腹を切って処置を続け、最終的に患者さんの傷をすっかり治してしまったのだ。そして、この患者さん以外にも彼は多くの傷を持った患者さんの治療を自主的に行っていたらしかった。私がほとんど諦めていた傷を治してしまったことと彼の献身的な行いに私はとても強い感動を覚えました。



これまでに参加した 5 回のキャンプで、キャンプ期間中に皮膚科を受診される患者さんを診療し、診断をつけ、キャンプ期間内に治療し、皮膚疾患や外傷などが治癒していくのを目の当たりにし、大きな喜びを感じたことがあつたのと同時に、長期間の治療が必要な患者さんに継続的な治療を続けられずキャンプを終えなければならないもどかしさや無力感もそれ以上に感じてきました。たった 5 日間のキャンプで、皮膚科医としてどれほど現地の患者さんのために役に立てているのだろうか、充実感や診療する意義を強く感じられないこともしばしばありました。しかし、今回のエドワードが行ったことは私のそうした思いを吹き飛ばしてくれるような出来事でした。自分が彼に伝えたことが、私がいない間にも彼を通して現地の患者さんの役にたっていたことは本当に意味のあることだと思います。誰かの言葉で『金を残すのは下、仕事を残すのは中、人を残すのは上』という言葉聞いたことがありますが、この言葉の意味を少し理解することが出来たかもしれません。エドワードが行ったことは、今

後自分がこの活動が続ける上での大きな原動力になる気がします。

今回もいくらかのガーゼや薬剤を彼に渡してきました。もしかしたら今もそれを使って彼が患

者さんの治療をしているかもしれません。また彼と会い、話ができることを楽しみにしています。もしまた来年 Gem East 村に行くことができれば、彼に何かを伝えられればと思います。

2014-2015 年の活動

アサンテ ナゴヤ理事 鍼灸師 坂光 信夫

お蔭様で今年も無事にケニアでの医療活動を実施することができました。例年通り今年も厳しい日程でしたが、参加者の皆様全員が無事に帰国することができたのは何よりです。無事に帰国することこそがこの活動の最大の目標ではないかという思いは年々強まっています。私個人は今年で4回目の参加ですが、アサンテ ナゴヤとしては6回目のキャンプ、ゲム・イースト村への訪問は7回目です。理事として2009年から続けている活動ということは意識しています。

今年は渡航の準備に昨年以上に深く関わりました。キャンプでの医療活動は、医療のプロの方々やケニアでの活動経験のある方にご参加頂いておりますので安心していました。ご参加下さった皆様には本当に感謝しております。実際私の担当の鍼灸部門においては、鍼灸師の中野先生と通訳のリリアンに頼りっぱなしでした。患者数が昨年より4割も増え、これまでにないほど忙しかったです。これまでのキャンプを通じて、鍼灸の効果が村で評判を呼び、多くの村の人たち、とりわけ日々の重労働で身体を痛めた女性たちが鍼を求めて来て下さったとのことで、それは嬉しく思いました。

ケニアではこれまでずっとナイロビの空港で入国ビザを取得していましたが、8月になって突然「9月1日からビザの発行は全てオンラインで行う。」という情報が入りました。旅行会社に問い合わせ、インターネットで情報を集め、キャンプ前で忙しい参加者の方々全員に連絡を取り、インターネットでのビザ取得をお願いしました。急なことで現地ではさぞ混乱しているだろうと案

じておりましたが、結果的には何と言うことも無く入国でき、ほっといたしました。

私は普段ルーネルドとの連絡を担当しており、頻繁にメールで情報交換をしています。工事の状況についても逐一報告を受けております。今回はゲム・イースト村に井戸設備が完成していることを期待していましたが、それは叶いませんでした。ダグラスさんの故郷、アセンボ村への2回目の訪問をし、初めて内科、皮膚科、鍼灸の診療を実施できました。しかし、昨年私が実施したお灸プロジェクトについては進展が見られませんでした。

ゲム・イースト村コミュニティセンターでの医療提供、ダグラスさんが切望しているアセンボ村への支援、これらをどう実現していくのか、現時点では明確な道筋は見えておりません。”Learn patience” パパが繰り返し書いてきた言葉です。それでも活動の中で、参加者の方々の言葉に励まされ、キシイの病院との連携のような今後に繋がる可能性はいくつか見つけられたと感じておりますので、もう少し粘ってみたいと思っています。引き続きアサンテ ナゴヤの活動へのご理解とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



2015 年度 キャンプ行程表

2015 年度 無料医療キャンプ 行 程 表			
9/11 (金)	21:35-6:20	中部国際空港⇒アブダビ	沖縄・東京組合流
9/12 (土)	8:55-13:00	ナイロビ着 コンフォートホテル宿	ホテルにてチャイドクより薬剤受け取り
9/13 (日)		キシイ（ベースキャンプ地）へ出発	ダグラスさん合流
9/14 (月)	08:00-13:00	病院見学→サウメ見学→帰宿 キシイ・レベル5 病院見学	医師、検査技師、澤崎等 11 名
	09:00-17:00	アセンボ村診療（ダグラスさんの故郷）	医師 2、看護師、鍼灸師 1
	09:00-17:00	医療キャンプ準備	日比野、渋谷、岩崎 見学スタッフ
9/15(火)～9月19日(土)		GEM EAST（キシイ泊）	無料医療キャンプ JICA 隊員 15 名参加・協力
9/20 (日)	07:00-発 17:00 ホテル着	キシイ⇒ナイロビ（陸路） 帰路途中 ヘルズゲート国立公園 昼食・観光	コロコツチョスラム婦人団体代表者、 JICA 隊員との会食
9/21 (月)	09:30-11:00 14:05-20:10	チャイドク診療所 訪問 ナイロビ⇒アブダビ	日本へ帰国
9/22 (火)	14:05	中部国際空港到着	

2015 年度 無料医療活動総支出

	日本準備（円）	現地使用（ksh）
旅費・交通費（宿泊・バス等）	1,427,776	5000
謝金・寄附		148,617
医療消耗品等	309,928	98,344
医療以外消耗品及昼食・夕食・食材費等	60,110	178,694
雑費等	6,684	12,450
	1,804,498	443,105(約 540,000 円)
	上記合計	2,344,498 円

* 別途、参加者一律 35,000 円＋ナイロビ航空運賃（平均 180,000 円）の個人支出をお願いしました。

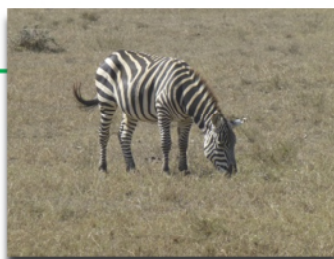
お 知 ら せ

- * 2015 年 11 月 15 日 無料医療活動報告会
- * 2016 年 4 月 2016 年度総会

* 会費、賛助会費、協賛及び寄付金をいただいた企業・団体および個人（敬称略）

（平成 26 年 12 月 9 日から平成 27 年 11 月 10 日までにご支援をいただいた皆様です）

川田初美・小川多恵子・木下ゆり・片岡紀子・鈴木泉・伊藤絹代・長山毅・白野倫徳・柴田益江・松浦華苑
新穂高杉崎・竹田・岩田光・榊原純夫・河村敦子・石居尚子・川西通子・みどりの会水曜担当者一同
グラクソスミス クライン・渋谷伸子・向島聡子・新穂高ひがくの湯・医）石田整形外科 石田義人
鳥居富美・国際ソロプチミスト名古屋-中・岩田有里波・菊地正・中野朋儀・日比野福代・能澤一樹
内海大介・カトリック港教会女性グループ・環境メディア・坂田侑平・飯田展弘・坂口実悠・加藤稔
ユニバーサル基金・石川美里・石川博司・西田雅子・西田瑞生・岡本裕子・内海眞・聖霊会・今村淳治
坂光信夫・岩崎奈美



編集後記

コミュニティセンターが HIV、マラリア検査の基点となるまで もう一步の
ところまでとなりました。残された一步にどのくらいの時間が必要かは現地の力に因るものが大きい
です。しかし、着実に歩みを進めておられます。また、キャンプ参加者の皆さんも幾通りかの現地との関
わりを持ち始められたと実感した 2015 年でした。多くの皆様に支援をいただきこの活動を続けてこ
られたことに心より感謝申し上げます。

岩崎奈美

事務局：名古屋市東区葵 1-25-1 ニッシンビル 906 TEL/FAX：052-933-1588

ホームページアドレス：<http://asante-nagoya.com>

フェイスブックアドレス：<https://www.facebook.com/asante.nagoya>